

写植屋さんと私

写植屋さんと私

小形克宏

一九八一年一月、西新宿六丁目唐川ビル

「小形くん、ちょっと来て」

村石さんは奥の編集室から顔だけ出すと、そう言って私を中へ招き入れた。ここは西新宿の外れにある唐川ビル。青梅街道からすこし入った裏通りにある、ビルとは名ばかりの薄っぺらな二階建。その一階に『ばふ』編集部はあった。大学三年生だった私はずっと以前から愛読していたそのマンガ情報誌の片隅に「無給スタッフ募集」の記事を見つけ、飛びつくように応募した。すると十人近くの集団面接でなぜか一人だけ合格、前年十二月からタダ働きの雑用係として働きはじめたのだった。

まもなく、社内で交わされる四方山話から、少し前に編集部的主力が内紛でごっそり抜

けたこと、だから現在は極端な人手不足に陥っていることを知った。道理でいつ行っても閑散としていた訳だ。

数カ月後に四年生になる私にとって、就職は嫌でもやってくる現実だ。しかし三流文系私大の学生にとって零細出版社だって高嶺の花であり、自分より優秀な他大学の学生に交じって就職活動をして、正社員として採用してもらえとは到底思えない。それでもどうかして出版業界に潜り込めないかと思いい、早めに手を打つつもりで応募した私だったが、この状況は紛れもなくラッキーだった。

村石さんは私より数年先輩、早稲田大学を留年し続けているという噂だった。『妖怪ハントー』の稗田礼二郎みたいなストリートロングで、物静かだけど怒らせるとちよつと怖そう。村石さんは人気のない編集室で、自分の机の隣りに私を座らせると言った。

「今日は小形くんに編集の仕事を教えるね」

彼は自分の机の上に並べられた『ばふ』のバックナンバーから一冊を抜きだすと、ページを開いて私に見せながら言った。

「ウチに限らず、どんな雑誌も最初に版下という、この誌面そっくりの雛形を作って、それを印刷しているんだ。ウチは記事の担当者が自分で版下制作することになっているから、まずその作り方を覚えなさいといけない。でも版下を作るには向き不向きもあるん

で……」

そう言って村石さんは、私のことを探るように見た。

「ひとまず今日は、版下を作るために必要な、写植の出し方を覚えてもらうね」

写植という言葉自体は、その頃私のような出版志望の人間には必読書だった『メデиаのつくり方』（別冊宝島）で知っていたが、現物を見たことはなかった。

その版下の文字の部分は、写植屋さんに頼んで打ってもらうので、まず写植という機械を使って打つんだ。

七月、新宿三丁目・レポートピアビル

目が覚めたら朝九時半だった。

「しまった！」あわてて起きた私は